

児童虐待 小児科医の視点

子どもをめぐる虐待事件が後を絶たない。医療の立場から児童虐待に関わり続ける2人の医師に、親の心理や共通する背景、虐待が子どもに与える影響などを聞き、深刻な虐待をどう無くしていくかを尋ねる。

小児科医の木下あゆみさん (45) 香川県善通寺市は医師になって20年、虐待家庭に向き合い続ける。その中には2018年3月、東京都目黒区で虐待を受け亡くなった船戸結愛ちゃん(5)もいた。結愛ちゃんは東京へ転居する

東京・目黒区の事件に向き合う

木下あゆみさん



◇おのした あゆみ 1974年、徳島県生まれ。高知医科大学。2001年から香川小児病院(現四国こどもとおとなの医療センター)に勤務。現在は同センター育児支援対談室長、小児アレルギー科医長。

地域と共に支援をつなぐ

①

「クを張り巡らせていた」とい

職域乗り合わせ

木下さんら医療関係者は2003年から、児相、保健所、司法関係者と連携して独自の育児支援ネットワーク会議を月1回開催。互いの職域を相互に乗り合わせる「ししし」のある支援力を入れている。医療機関で見つけた虐待の端緒を切れ目無くつなぎ、支援を続けるため

ネットワークの中で、医療機関は出産や乳児健診、予防接種などで、「どの機関よりもいち早く家庭に介入できる機関」と位置付ける。児相や児相、市町村の保健師らの介入は重大事案に限られ、家の中に入れてもらうことも容易ではない。医療機関なら患者側から来てくれるためだ。

情報共有できず

ただ、転居から1カ月あまりして、結愛ちゃんは「きょうよりかあしたはできると言う」から、ゆるゆると「お母さん悲痛なメモを残し、短い生誕を閉じた。東京の児相職員は一度も結愛ちゃんに会うことができないままだった。

「東京の児相へ危機感を引き継いだつもりだったが、同じ温度で伝わらなかった。転居で支援のネットがすぼりとなっていった。7月中旬、八代市の熊本労災病院であった職員会で木下さんは吐露した。情報共有の難しさや無念さをいじませながら死ぬまでの間、家の中で傷つきながら必死に生きると子どもがいてるという実感を、皆が持

ち続けてほしい。そうしないと子どもたちは、簡単に滑り落ちる」。

声なき声に代える

木下さん自身、「虐待する親を周囲が包みたくなる気持ちも分かる」と話す。風化して隠れたようなやけど痕、ひもでたたいたような痕跡。それでも「やかんの痕をこぼした」「つまりいた」などと証言する親も多い。「親を責めても子どもへの虐待は解決しない。本当は親自身が困っている」。親の不自然な言動の裏に、問題は常に

虐待の発生源は、貧困や夫婦関係、家庭内暴力など、親が抱えるさまざまな問題ばかりでなく、子どもの発達や病気が複雑に絡み合うことが多い。子育ての悩みやイライラ、子どもを放り出したい気持ちなどは、親でも経験する。虐待例の総数には多くの予備軍があることが

「どの親も最初から虐待したくなくているんじゃない」。今年6月に札幌市で起きた事件では、母親は生まれて間もなく娘の写真と、書きひかれた文書をSNSに投稿していた。「私たち医療関係者は子どもの声なき声を伝える代弁者。このまま死んじゃうかもしれない」。救えなかった命を悲しい思いを懸えて支援をつなぐ必要を訴える木下さん。ただ、虐待の芽を摘むには医療や行政だけでなく、地域の間も欠かせないという。「支援からこぼれるおちないよう、周囲がもっとおせっかいになろう」

(秋田賢一郎)